

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛 友 会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

075-753-5270

www.rakuyukai.org

研究者の道

ーチャレンジ

洛友会会長 松本 紘



新年、おめでとうございます。

学生みなさんの中には、今年、新たに社会人となられる方もいらっしゃるでしょう。少し私自身の研究者としての経験をお話しさせていただきます。私は京都大学で電子工学を学び、研究者の道へと進みました。選んだ研究テーマは電波を中心とした宇宙科学や宇宙太陽光発電でした。後者は、生み出された電力を宇宙から地球に送電するという研究テーマにもつながります。こうして、宇

宙科学の分野において、宇宙プラズマ物理学、宇宙電波工学などを専門分野として研究に取り組みました。元来、宇宙科学は理学系の学問でしたが、私を取り組む研究テーマは、工学系、理学系の研究者が共同で行う研究分野となりました。理学系学問の究極の目標は真理の探究です。これは崇高な目標ですが、私はより実用的で社会貢献につながるような工学的研究を大切にしつつ、科学研究を進めていきました。

恩師、先輩の研究を承継しつつ、新しい研究分野を切り拓き、国際舞台で活躍することが研究者としての目標でした。新しい分野への挑戦には勇気が必要です。経験のある分野であれば、大きな失敗はありませんし、成果も上げやすいでしょう。しかし、私は失敗を恐

れず挑戦する精神こそ貴重だと思つてやってきました。失敗を乗り越え、それを次の成功の糧とするために必要な資質とは何でしょうか。専門分野の知識を深め、経験を重ねるだけでなく、専門分野を超えた根源的な哲学、世界観、歴史観などを身につけることが必要ではないかと、私は考えます。迂遠に感じるかもしれませんが、深い教養を身につけ、人格の幅を広げることは、新しい分野の目標に到達することにつながっていきます。

電気系学科で学ばれたことは幅広い分野において応用できます。それを基礎として、深い教養を身につけた洛友会のみなさんが、新しい分野にさらに挑戦されることを期待しております。



迎 春

二〇二三年一月一日

本部役員

顧問 荒木 光彦
会長 松本 紘
副会長 三浦 良隆

支部長

伊藤 八大
和田 修己

本部幹事

北海道 木元 伸一
東北 伊藤 篤
東京 北條 史
北陸 笠原 禎也
中部 酒井 和憲
関西 武知 秀行
四国 小嶋 唯司
中国 前田 耕一
九州 能見 和司

北野 正雄
野田 進
萩原 朋道
松尾 哲司
佐藤 高史
竹原 壽良

コロナ禍が急加速させた 新デジタル時代の歩き方

北陸支部長

笠原 禎也

(平1年卒)



令和2年5月末から北陸支部長を務めております笠原と申します。

私は、木村磐根先生の御指導のもと、平成元年に学部を卒業、平成3年に修士課程を修了し、博士課程に進学しましたが、翌平成4年に、木村磐根先生の研究室の助手として、電気系教室スタッフの一員に加わることとなりました。4回生で木村研に研究室配属されたのは、木村先生が主任研究者(PI)を務めるVLF帯の電磁波観測器を搭載した科学衛星「あけぼの(EXOSID)」が打上げを1年後に控えたタイミングでした。あけぼの衛星は、地球の極域オーロラに関わるプラズマ波動と荷電粒子の相互作用のメカニズ



ムの解明を主目的とし、私が卒論を提出した約1週間後の平成元年2月に打ち上げられました。当時の計算機やネットワーク性能ではとうてい全処理不能な膨大な観測データを少しでも多く扱えるよう、大学院在学時は、衛星運用のために宇宙科学研究所に出かけるたび、ひたすら磁気テープに観測データをコピーし、研究室に持ち帰っては、日夜、解析に取り組みました。

木村先生の御退任後は、佐藤亨先生の研究室助手を務め、平成14年4月に膨大なあけぼの衛星の観測データを引っ提げて金沢大学に異動し、同衛星のデータ解析に加え、太陽系宇宙を探索する科学衛星(月探査衛星「かぐや」、水星探査衛星「BepiColombo」みお「地球磁気圏探査衛星「あらせ」など)に搭載するプラズマ波動観測器の開発と、そのデータ解析を行っております。この間、生存圏研究所(当時の超高層電波科学研究所)の松本紘先生を

はじめ、諸先生方のご指導を仰ぎ、これまで仕事を続けてまいりました。

あけぼの打ち上げ当初は、データを記録する磁気テープの容量に比して、衛星から送られてくる観測データのほうが膨大で、とうていすべてを見ることなど不可能という状況でした。しかし計算機・ネットワークの発展はすさまじく、いまや科学衛星から降りてくるデータの蓄積・全処理が、たやすくてできる時代となりました。一方で、衛星搭載機器の観測性能・分解能の増大に比べ、地上へのデータ伝送容量は全く追いつかないのが現状で、今は衛星―地上間の伝送能力が大きなボトルネックとなっております。この課題に対し私たちは、衛星機上で準リアルタイムに有用データの選別や圧縮処理を行い、少ない伝送帯域でできる限り多くの情報を伝送可能とする情報処理技術を鋭意進めております。同時に、近年は大学の研究室レベルで超小型衛星が作れる時代となり、金沢大学では独自の超小型衛星「こよう」を来年度打ち上げる計画で、衛星・地上設備の最終調整が急ピッチで進んでおります。特に私の研究室では、衛星搭載用ソフトウェアと地上局の各種支援システムの開発を担当するとともに、今後、このような超

小型衛星が多数打ち上げられる時代を見越して、ワンチップの超小型電波受信器・信号処理モジュールの開発にも研究の幅を広げつつあります。

令和2年の1月頃、北陸支部幹事団の皆様から、私に次年度からの支部長就任の打診がございました。金沢に越してすでに20年近くたっておりましたが、上述の通り電気系教室とは切っても切れない立ち位置にしながら、それまで洛友会北陸支部に一度も顔を出したことがなく、そのような者がいきなり支部長になるのは…と、いったんはお断りしようと思いました。が、規模の小さい北陸支部ゆえ、ぜひとも、と幹事団の皆様からの熱いお誘いをいただき、これまでの不義理をお返しすべく、憎越ながらお受けした次第です。

年に一度の北陸支部総会は、例年5月に開催されます。しかし折悪しく、令和2年春から急速に蔓延した新型コロナウイルス感染症の影響で、同年の総会は書面開催となり、支部のどなたともお会いすることなく、支部長を拝命することとなりました。令和3、4年度の支部総会も、Zoomによる遠隔開催を余儀なくされ、いまだ北陸支部の皆様方と対面で御挨拶できず仕舞いですが、次年度こそは！とアフターコロナ時代の到来を心待ち

迎春
二〇二三年一月一日

京都大学

電気関係教室

教員一同

鉄 S C C

代表取締役社長 松尾 泰

宇宙技術開発 鉄

代表取締役社長 松尾 泰

電子開発学園
北海道情報大学

理事長 松尾 泰

迎春
二〇二三年一月一日

にしております。

さて、突然世界中を巻き込んだ惨禍となった新型コロナウイルス感染症の拡大は、我々の日常生活や生き方に多大なインパクトを与えました。電子情報通信の分野の関係では、遠隔授業やリモートワークがごく当たり前となり、場所・時間を問わず、世界中の誰とでもつながれる新時代が本格到来したことを、誰もが認識するきっかけとなりました。逆に言えば、このような急速なデジタル化の流れから取り残されないこと、すなわちデジタルトランスフォーメーション(DX)の推進が、会社や大学の浮沈、今後の生き方を左右する最重要課題と言えます。私が勤める金沢大学では、コロナ禍前から統合ユーザ認証システムを介して学内各種情報システムをポータルシステムに集約し、学生向け教育も電子教材や学習支援システム(LMS)を早期から導入していたため、比較的混乱なく遠隔授業体制に移行することができました。さらに昨年4月には、本学の情報系センター(現・学術メディア創成センター)を、全学のDX計画を戦略的に統括・推進するコア組織として体制強化を行い、xR(VR・AR・MR)等のDX技術を開発した教材の開発や、コンテンツスタジオでの動画コンテンツの撮影・編集、作成したDXコンテンツを自在に活用するためのシステム構築など、教育DXを急速に推進しております。私自身は、

コロナ禍が始まった令和2年4月(洛友会の北陸支部長着任とほぼ同時期)に、当センター長を拝命することとなり、まさにコロナ禍で急速に動き始めたDXの激流の中で奮闘しております。その奮闘ぶりは、以下のYouTubeから一般公開しておりますので、もしお時間ある方は御覧いただけますとありがたいです(<https://www.youtube.com/watch?v=11W2DIg3U>)。

北陸という地域は、身近に自然が多く、気候はさほど厳しくもなく、食べ物や住環境にも恵まれているなど、比較的住みやすい地域といわれます。実際、金沢に越して来て、最初の冬は雪に悩まされましたが、慣れてしまえば非常に良い土地柄です。一方で、大都市圏から若干距離があり、人口の流出・減少、過疎・高齢化などが地域の課題とされてきました。洛友会の北陸支部も所属会員の数が少なく、こじんまりしがちではあります。急激なDXの進行とともに、物理的距離を越えてヒト・モノ・カネの流通性が飛躍的に発達した今、ぜひ他地区の皆様方とも交流を深め、この北陸支部を盛り上げることに微力ながらも貢献できればと考えております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

教室だより

令和4年度電気系教室懇話会報告

令和4年度電気系懇話会が教員学生、卒業生他約120名以上の参加を得て、11月22日(火)に電気総合館大講義室で開催された。今年度は、初めての試みとして、洛友会と電気系教室共催の「先輩と学生との交流会」と同日開催とした。はじめに司会の松尾哲司学科長が講演会に先立って挨拶をされた。その後、講師をお願いした、橘邦英名誉教授、岡嶋達也氏(昭和61年卒)のお二方により、非常に興味深い講演を頂いた。ご講演の概要は以下の通りである。

「プラズマ理工学から辿る科学史」マクスウェル・ボルツマンの時代」

橘 邦英 名誉教授

京都大学名誉教授の橘邦英先生にご講演いただいた。橘先生は京都大学工学部機械工学科のご出身であり、同大学大学院の博士課程・東京芝浦電気総合研究所を経て、1974年に京都工芸繊維大学工学部電気工学科に助手としてご着任された。その後、同大学教授

を経て、1995年に京都大学大学院工学研究科電子物性工学専攻に教授としてご着任され、2009年にご退官されるまで、プラズマ理工学にかかわる先駆的研究を推進された。ご退官後は愛媛大学理工学研究科電子情報工学専攻教授、大阪電気通信大学工学部電気電子工学科教授、同大学学長を歴任され、2021年秋の叙勲において瑞室中綬章を受賞された。

ご講演では、プラズマ解析の基礎となるマクスウェル及びボルツマン方程式について、それらが発見された時代背景も交えながらご紹介いただいた。特に、同じ時代を生きたマクスウェルとボルツマンについて、その生涯を対比しながら科学史をお話し頂いた。続いて、熱力学の法則の基礎や、情報理論におけるマクスウェルの悪魔と沙川氏らによる悪魔の働きを理論的に検証する道についてご紹介いただいた。また、最先端半導体の製造に欠かすことのできないプラズマプロセスについて、その数値解析とマクスウェル及びボルツマン方程式の関係を話していただいた。続いて、マクスウェルやボルツマンのレガシーとして、そこから花開いた学術体系の概観をご紹介いただき、ご講演を締めくくられた。ご講演の最後には質疑応

迎春

二〇二三年一月一日

公益財団法人

京都技術科学センター

理事長 田中 一義

副理事長 山田 啓文

公益財団法人

応用科学研究所

鐵 田中プリント



答の時間が設けられ、プラズマプロセスの動向について活発な議論が行われた。



「東海道新幹線を支える技術の歩みとたゆまぬ進化への道筋」

岡嶋 達也氏

(東海旅客鉄道株式会社・昭61年卒)

東海旅客鉄道株式会社の岡嶋達也様に東海道新幹線についてご講演頂いた。岡嶋様は京都大学工学部電気工学第二学科のご出身であり、電気工学第二専攻にて修士課程を修了し、東海旅客鉄道株式会社に入社された。入社後は東海道新幹線に限らず在来線等の幅広い仕事を御担当され、現在は技術開発や将来の技術戦略に関わる仕事に従事されている。

ご講演ではまず、JR東海の概要について御説明頂いた。東海道

新幹線は東京～名古屋～大阪間の日本の大動脈を安全・正確・高頻度に輸送する必要がある、会社発足以来、東海道新幹線の輸送本数は右肩上がりに上昇しているとのことであった。東海道新幹線の歩みについて、戦前の「弾丸列車計画」にルーツがあり、その際に策定された規格の多くが東海道新幹線に引き継がれていることを御説明頂いた。開業時の東海道新幹線の基本コンセプトとして、専用線であり、自動列車制御装置(ATC)を使用することで衝突回避を実現、特に、貨物列車や低速旅客列車を排除した高速旅客専用線(Crash avoidance)と

することで列車事故によるお客様死傷ゼロという安全性を確保していると御説明頂いた。ATCは線路を複数の区間に分けて、区間にいる車両同士が信号を送りあうことで一定の距離を保つ仕組みがあり、開発当時はノイズを多く含む信号の送受信、復調方式の工夫が求められ、伝送方式の変遷について御説明頂いた。開業してしばらくは「ひかり」「こだま」の2種類の運行が続き、飛行機との競争が激しくなる中、東京～新大阪間をこれまでより30分早い2時間半でつなぐプロジェクトが発足し、「のぞみ」号の運行が開始されたとのことであった。開始当初は朝晩各1往復

のみであったが、需要の増大から「のぞみ」の運行を増やし、現在に至っている。その間、車両の進化も進み、0系から最新のN700Sを比較すると重量が270tも減少したことを御説明頂いた。



高速・大量輸送に特化した東海道新幹線は他の新幹線と異なる面が多いため、JR東海は独自技術開発体制を整えているとご紹介頂いた。一例として、地震対策について御説明頂いた。遠方の地震計を活用することで、運行中の列車に揺れが届く前に地震発生を検知して緊急停止することで脱線・逸脱の防止がなされているとのことであった。

我が世の春を謳歌してきた東海道新幹線だが、コロナ禍が経営環境に大きな変化をもたらしたとの

ことであった。収益力強化と効率化・省力化のため、様々な施策を推進しており、最近の事例としてビジネス車両(Swork)の整備や、待合室においてもお客様が仕事できる環境の整備について御紹介頂いた。今後の構想として、東海道新幹線における半自動運転の実現を目指していることを御説明頂いた。ご講演後には、岡嶋様に御質問をする機会が設けられ、ご講演内容に関して活発な質疑応答が行われた。

講演会終了後、総合研究8号館NSホールにて茶話会が開催された。松尾哲司学科長が開始の挨拶をされ、珈琲を片手に和やかに歓談が行われた。萩原朋道洛友会事務局長に締めめの挨拶を頂き、名残りを惜しみつつも時間の関係で解散した。



会員寄稿

インバウンド

医療ビジネスに思う

丸山 豊史

(昭45年卒・四国支部)



大学の経営に携わり10年、経営学部日本人学生数が就任時から倍増し、定員充足率100%が見え、私の仕事は一段落だと思っていた時、大学院での教え子から「中国人の収入が増え、糖尿病が急増しています。その診断や治療のため日本に行きたい人が増えています。日本で医療通訳の会社を一緒に作りませんか。」と言ってきました。私も年齢が70才に近付き、楽しみ半分のできる仕事に替えたいなと思っていたので、面白そうな医療ツーリズムの状況を調べることにしました。当時はビジットジャパン等の活動で海外からの旅行者数が2000万人を超え、4000万人にするという目標を政府が掲げ、これに向けて官

民一体となった取組を推進してきたところです。

○遅れている日本の医療ツーリズム

日本でも30年近く前から医療インバウンドの取組が行われていますが、あまり進んでいません。たしかに、日本の医療技術は進んでいて、全国的にも均一かつ均質な医療サービスの提供ができるようになっていきます。しかしながら、国際医療ビジネスという面で見ると後進国です。日本では地方の病院に至るまで高い治療・手術レベルを維持しています。しかし、英語や中国語といった外国語での患者対応力は低いと言わざるを得ません。国際医療ビジネスの東南アジアにおける先進国であるシンガポール、台湾、インド、タイ、韓国等の先進医療を行える病院では清掃従事者等を含めて医療従事者のほぼ全員が英語を話しますし、欧米の数分の1の費用で治療や手術を行います。例えば、バンコク・ドゥシット・メディカル・サービシーズは国内外に45病院を有する東南アジア最大級の私立病院グループです。45病院中37病院がJCIなどの公的機関の認証を取得し、低廉な人件費を活用して先進国と同水準の医療を低価格で提供しています。また、海外オフィスの設置や定評がある海外の病院

◎退職記念行事のご案内

令和5年3月31日付けで、白井康之教授、大村善治教授、和田修己教授の3名が定年退職されます。左記の通り、最終講義を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

白井康之教授 最終講義のご案内

日時…令和5年3月7日(火) 午後3時00分～午後4時30分
場所…吉田キャンパス本部構内 総合研究11号館114講義室
題目…「液体水素冷却超電導応用電力機器の研究開発
～電力・水素協調エネルギーインフラをめざして～」

申込フォーム: <https://tinyurl.com/2lfnpjx>



連絡先…川山 巖 准教授
Tel…075-175314723
email: kawayamaiwao3a@kyoto-u.ac.jp
※最終講義終了後に懇親会を予定しています。

大村善治教授 最終講義のご案内

日時…令和5年3月10日(金) 午前10時30分～午後12時00分
場所…桂キャンパス 船井哲良記念講堂
題目…「電磁界シミュレーションが明かす宇宙プラズマの謎」
申込フォーム: <https://ukyoto-u.jp/prof-omura-final-lecture>



連絡先…海老原 祐輔 准教授
Tel…0774-3813844
email: ehihara@rsh.kyoto-u.ac.jp
※Zoomによるハイブリッド開催です。

和田修己教授 最終講義のご案内

日時…令和5年3月13日(月) 午後3時00分～午後5時00分
場所…桂キャンパスBクラスター 事務管理棟1階 桂ホール
題目…「エンジニアとしてEMC設計と国際標準化の35年」
申込フォーム: <https://forms.gle/9fQka5NTUmKNKSfs5>



連絡先…和田修己先生退職記念会
email: kinkenai@cct.kuee.kyoto-u.ac.jp
※対面で行いますが、Zoomによる配信も予定しています。

との提携ネットワークの構築など、積極的にインバウンド患者の取り込みに向けた施策を実行しています。加えて、政府が主体となつてクアラルンプール空港やペナン空港の到着ロビーにブースを設置しており、出入国手続き簡略化や医療渡航者専用待合場所等のサービスを提供しています。

○日本にとつては

最初で最後のチャンス

海外からの患者は、日本語しか通じず患者自身の気持ちや医療従事者にうまく伝えられないなど、患者の母国語での会話が不自由で、海外からの患者と病院との高品質の連携ができていない日本での治療は希望しません。さらに、中国の人は、英語を話せる人が少なく中国語が通じず共通語が英語の病院をあまり希望しません。それに加えて、中国では最近の急激な経済発展に伴い、個人所得が急激に増え、国際医療患者の中心である数億円以上の資産を持つ層や健康に関する意識の高い層が急激に増え、インバウンド医療の大きなマーケットが育ってきました。このような状況になったため、日本にとつては初めてで、そして最後のチャンスとして国際医療ビジネスを拡大するチャンスがやってきました。

○日本のインバウンド

医療ビジネスとは

日本が今から展開できるインバウンド医療ビジネスは、すでに近隣の国で大きく展開されている英語圏の患者向けではありません。日本が優位に立てるビジネス形態は、中国語を母国語とし、英語が話せない患者向けのインバウンド医療ビジネスです。しかしながら、医療従事者全員が中国語を話す病院を作るのは非常に困難です。そこで優秀な中国語医療通訳(最近では医療コーディネータという職業も出て、日本語とともに、中国語や英語を使える人も育ってきています)を患者と医師や看護婦との間に入れることにより、スムーズな意思疎通を図るという医療ビジネスです。このビジネスを展開する会社の形態としては、作りやすいのが医療通訳・医療翻訳会社で、日本語の上手な中国からの留学生中心にいろいろと会社を作っています。通訳会社以外には旅行会社という形態があります。旅行会社はビジネス展開がやり易く、現在はビジネス展開の中心の方式となつています。しかし、旅行会社を作るには旅行業務の資格が必要です。我社の場合は、ビジネスを始めてしばらくして、社員から「一番暇なのは代表をしている先

生だから、先生が資格を取つてね。」と言われて総合旅行業務取扱主任者資格を取りました。

○医療通訳・翻訳者の確保

幸いなことに30年ほど前からビジネスマンの傍ら大学院で教え、ゼミナールを持っていましたので、多くの教え子がいます。大学院経営学研究科で修士論文指導を行った中国からきた院生が100名以上いましたし、大学院卒業後日本で就職したいというので就労ビザを取るのを手伝った大学院生が約600名いました。その多くは中国に帰国しましたが、日本の永住権を取得した卒業生、日本国籍を取つて今も日本で生活している卒業生もたくさんいます。そのような日本に住んでいる卒業生に相談したところ、通訳や翻訳作業だったら手伝いますという卒業生が多くいましたので、通訳者の確保はすぐにめどが立ちました。また、ビジネスを始めてわかったのですが、東京から通訳を呼び寄せるのと、中国から呼び寄せるのは費用面ではあまり変わりません。

○ビジネスは日本のどこで

60才までは東京で過ごしていましたし、自宅は東京吉祥寺にもあります。周りからは東京でのビジネス展開の方がやりやすいと言われました。しかし、60才の時に

香川県にUターンし、大学に職を得たのは、子供時代を過ごしお世話になった香川県を元気にするのを手伝いたいという思いもありました。

一方で医療ツーリズム顧客の多くは東京とか大阪といった大都会でのサービスを希望します。香川県をはじめとして地方の都市は、東京等とほぼ同じレベルの診断・治療を提供できるものの、病院や医師の絶対数が少ないというハンディをもっています。そのような多くのハンディがあるのですが、まずはお世話になった香川県の交流人口を増やすのを手伝うという事も目的に、ビジネスの場所としてまず患者には香川県を薦め、次に東京を勧めるという道を選びました。

○どのような検診、治療をするか

中国から来たお客様をどのような病院にお連れするかは、通訳者の人間性とともにビジネスの成否を決めます。そこで、医療・病気の治し方の常識を身に付けるために医療通訳の勉強をしました。病名が判っている患者への接し方・対応方法が中心で、求めている知識とは違うものでした。そこで次に予防医学、健康診断について調べました。幸いなことに身近に健康診断専門医がいたので、いろ

いろと教えてもらいました。

その結果確認できたことは、病状を明確にする第1ステップは日本の健康診断で広く行われている毎年一回の基本的な血液検査と、レントゲン画像、PETCT画像等の画像検診の二つを行い早期に病気の兆候を発見する方式が、費用的に安く患者の時間をあまり束縛しないなどの点で優れていることが確認できました。

しかしながら、海外からの患者の場合は①経年変化を見ることが難しいのと、日本に来るまでに受けた検診結果、血液検査装置等の性能を確認することが難しい。②来日時一回の人間ドック受診で身体の内なる部位の異変を見つける必要がある。そこで、血液検査の範囲や画像健診の範囲を広げる。③病気の治療に当たっては個人医院よりも大病院の方が、病気のカバー範囲が広く、セカンドオピニオンを求める外国人患者に向いている。④病名が明確になり、手術等の処置が必要な段階では名医といわれる先生に治療や手術をお願いするのがいいという極めて常識的な結論でした。

○病院との連携をどう考えるか

日本の医療ツーリズムを展開している企業では診断や治療で信頼できる大病院との連携を進め、患者向けに「多くの大病院、専門病院と

連携していますので、安心して来日してください。」といった広報がな

されています。確かに患者である中国の人にとっては、大病院と連携していることは安心できると思います。また、例えば患者ががん患者というのであれば、有明病院等優れた病院は明確でし、2型糖尿病と病名が判っているのだら、2型糖尿病に詳しい医者のある病院と連携すればいいと思います。しかし、現実には受け入れる患者は「最近元気がないので、病院に行ったが、病名がわからず、どのような生活や治療をすればいいのかわからない。そこで日本の優れた病院でセカンドオピニオンをもらいたい」というような患者がたくさんいます。また別の例では、人間ドックでの検診の結果、乳癌の可能性を指摘された患者がいました。その患者の場合は日本に住んでいる友人からの推薦だったのですが、彼女の方からある大病院を指定してきました。確かにその大病院は乳がん手術数も比較的多く、乳癌専門医も数名いました。そこで2次検診をお願いしたところ、両胸の生検をしましょうと言われました。そのような検査方針にびっくりしたという事もありました。このようなことから、大病院との連携は求めましたが、専門医個人との連携も大切であるとの印象を持っています。

〇コロナ後を見据えて

コロナの流行とともに、来日する患者は激減し、同業者の多くがビジネスを縮小し、従業員を解雇してきましたし、廃業した会社も多いようです。中国ではゼロコロナ政策が続くそうだし、対日感情も非常に良いという状況でもありません。しかし、コロナの収束が見えてきた今は国際医療ビジネスを数年前と同じように再度展開するチャンスの時だと思っています。

日本では疲れた体を元気にし、体力を回復させるために昔から「湯治」という習慣があります。香川県に本拠地を持つ我社としては特徴の一つとして、「健康を増進する。手術後の体力回復を早める。」等の湯治客の発掘というか、中国マーケットに「湯治」という健康法を紹介していく予定です。その他、多くの同業者と同じように、ホームページ、SNSや動画ソフトでの情報発信を行い、顧客の再発掘をはかり、若い社員に引き継ぐことが出来るビジネスにしたいと思っています。

京阪特急プレミアムカー

井上 欣也

(平元年卒・関西支部)

卒業以降、現在に至るまで京阪電気鉄道に勤めており、車両や運輸部門に携わる経歴が長いことから、今回、2017年8月より運行を開始した当社プレミアムカー導入までの経緯や現況についてご紹介させていただきますと思います。

2014年当時、右肩下がりであった運輸収入を何とか増やせないか、従来の固定概念に捉われない斬新なサービスを提供できないかという主旨で検討に着手し、当社にとっては営業開始以来初めての座席指定列車を運行してはどうかという結論に至りました。

その後、具体的な計画策定へと動き出したわけですが、何せ初めての事だらけで手探り状態からのスタートです。まずは先行事例を研究しなければという事で、鉄道愛好家さんならに他社の座席指定列車を行脚して乗り尽くすというところから長い道のりが始まりました。

当社は路線長がそれほど長くなく、専用の有料特急列車を新たに製作するには適さないとの考えから、既存の8000系特急車両の一部を改造するという方法を選択

しました。

8000系は片側2扉かつ座席が2+2列のクロスシートであり、料金が不要な車両としては既にハイスベックであったため、それをさらに差別化できるようなグレードの高い仕様とする事が必須と考えられました。

シート配列を2+1列として、座席幅は一般車より30ミリ広い460ミリに拡大するとともに、座席間隔は100ミリ長い1020ミリ、出入口は1箇所にするなど居住性を格段に向上させた他、電源コンセントやWiFiはもちろん、微粒子イオン発生器のような最新技術も取り入れ、「上質な移動空間」というコンセプトに徹底的にこだわりました。

また、内外装についても、デザイン会社と議論を尽くした結果、高級感あふれる仕上がりになったと自負しています。

なお、改造にあたっては、実物の模範車両を製作してリアルに体感、確認する事で、その後の詳細設計に活かす事ができました。

一方、ソフト面においても車両に負けない最上級のおもてなしをご提供したいと考えていました。そこで、当社を含め多くの企業への接遇研修にも定評のあるANAのグループ会社にアテンダ

ント業務を委託したのですが、お客さまからはお褒めの言葉を継続的に頂戴しており、プレミアムカーのリピーターやファンになっていただける動機付けにもつながっている実感しています。

さて、プレミアムカーは8両編成中1両(定員40名)であり、座席提供数の少なさが当初より課題となっていました。

特に着席ニーズの高い朝夕ラッシュ時には、プレミアムカーが満席となる事は容易に想像できたので、編成全体が座席指定車両となるライナー列車(定員456名)の運行は、是非とも実現したいサービスであると構想を練っていました。

ライナー列車には固定のお客さまが徐々に定着していただけたという特徴があり、運行開始時の2列車(平日朝2本)からダイヤ変更毎に増便を重ねて、現在では9列車(同朝5本、夜4本)という運行体制になっています。

他方、8000系車両は10編成保有している一方、昼間時の特急は10分ヘッドで運行していた関係から、毎時6列車中2列車にはプレミアムカーが連結されない変則的な車両運用にならざるを得ない事もわかっていました。

そこで、まだプレミアムカーが運行開始する前の段階ではありま

したが、やはり主として特急に運用されている3000系にもプレミアムカーを連結すべしとの決断に至りました。

3000系は扉数が多く、車体改造への影響が大きいことや、座席と窓配置の位置関係など改造では解消できなかった設計上の制約を排除できる点から、新造とする方針を採択しました。

製作にあたっては、座席をより座り心地のよいものと改良を加えた他、座席間隔も20ミリ広げるなど、さらなる快適性の向上を図りました。

しかし、8000系との一番の違いは、一般車両が2+1列シートかつ3扉で輸送力が高く、乗降時間も短いことからラッシュ時にも運用しやすいという点にあります。

2021年1月からの6編成増備により、特急の90%以上(平日平均)をプレミアムカー付にできたと同時に、朝の大阪方面行の運行本数は1・7倍以上(12→21列車)となり、「プラチナチケット」争奪戦の緩和に役買う成果をあげる事ができました。

なお、3000系プレミアムカーは、前述の創意工夫や完成度の高さが評価され、「鉄道友の会」選定の「2022年ローレル賞」を受賞した事を申し添えておきたいと思っています。

ところで、料金を頂戴する列車については、首都圏との通勤時間の長さや混雑度、お客さまの価値観の違いなどから関西ではなじまないのではないかとという危惧もあった中、新たな鉄道サービスに期待が膨らむ一方、一抹の不安を抱えていた事も事実です。

しかし、蓋をあけてみれば、概ね10分に1本、終日で180列車(平日・土休日とも)という運行頻度により時間を気にせず待たずに乗れるという利便性に加え、大阪・京都間でワンコイン(500円)という比較的リーズナブルな価格設定も相まって、平均乗車率は休日でも80%近く、平日も70%を超える勢いで、上記のような懸念は取り越し苦労であったと言える水準のご利用をいただいているところです。

また、ライナー(一般車料金…大阪・京都間380円)についても時間帯によって差はあるものの、平均乗車率50%以上と当初の見込み以上の数字をあげる事ができています。

プレミアムカーの運行開始時期と前後して、同業各社においても座席指定列車の導入や増発が相次いでおり、ご利用者の要望にお応えして多様な選択肢をご提供するという施策にフォロワーの風が吹いているように思います。

また、密を回避できるパーソナル空間という特色は、ウィズコロナ時代のサービスにマッチしているとの手応えも感じています。

京阪特急には、テレビカーやダブルデッカー車など時代を先取りしたサービスを手掛けてきた歴史があります。

これからも、京阪特急ブランドに磨きをかけ、お客さまに選んでいただけるよう取り組んでいきたいと決意を新たにしている次第です。



支部だより

関西支部交流会報告

洛友会関西支部では、会員相互の交流を目的として、令和4年9月29日(木)にホテル京阪京橋グランデにて交流会を開催しました。

今年度より関西支部の運営体制を見直し、イベントの目的を会員相互の交流に特化するとともに幹事の負担軽減を図っています。体制見直し後初回となる今回の交流会は、従来関西支部で実施しておりました「異業種交流会」に近い内容となりました。コロナ禍のため長くイベントの実開催ができていなかったこともあり、大変多くの会員にご参加いただきました。

前半の講演会では、洛友会本部事務局長の萩原朋道教授(昭和59年卒)より、京都大学電気系教室の近況についてご説明いただきました。母校が現在どのように変わっているのか、学生時代にはなかった最近の教育プログラムなど、卒業生一同にとって興味深い内容をご説明いただきました。

後半の懇親会では、武知支部長(昭和57年卒)のご発声による乾杯の後、久しぶりに再会した同窓生と近況を報告し合ったりするな

ど、会員相互間の交流を深めました。最後に高野登志裕様(昭和63年卒)から締めのご挨拶をいただき、散会となりました。

昭和44年卒から平成31年卒まで幅広い世代の会員49名にご参加いただき、終始和やかな雰囲気の流れとなりました。

伊藤 薫(平成21年卒) 記



第118回関西支部ゴルフ競技会報告

(プレー状況)

第118回関西支部ゴルフ競技会が令和4年10月15日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は天候にも恵まれ、アウトは伊藤氏（昭和34年卒）、インは平嶋氏（昭和38年卒）の始球式でプレーを開始し、合計24名（うちシニア5名）が競技に汗を流されました。また、今回は初めて女性に参加され、競技会が一層賑やかな雰囲気になりました。

結果は以下のとおりです。（敬称略）

（シニアの部）
優勝 吉田 豊彦 （S56年卒）
2位 伊藤 俊一 （S34年卒）

（一般の部）

優勝 佐伯 昭 （S56年卒）
2位 吉村 治輝 （H23年卒）
3位 井上 智弘 （H24年卒）

また参加者は以下のとおりです。（敬称略）

S34 伊藤 俊一

S38 平嶋 正芳

S44 北野 徹

S49 西 亨

S56 佐伯 昭

美濃 由明

吉田 豊彦

H3 藤岡 直人

H4 下田 一彦

H7 一木 将人

H15 西村 英孝

H23 出原 歩

吉村 治輝

H24 井上 智弘

H26 上田 弘貴

三木 穂高

H27 小野 裕介

H29 依田 学樹

H29 黒田 健太郎

H30 藤田 秀真

H30 喜多 謹仁

H31 前原 圭汰

H31 河本 昌樹

中澤 杏咲

（懇親会）

プレー終了後、下田氏（H4年卒）の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

懇親会は伊藤氏（S34年卒）の乾杯のご挨拶からはじまり、表彰式では、優勝者に景品および優勝カップが手渡されたあと、吉田氏（S56年卒）・佐伯氏（S56年卒）より優勝報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

（お知らせ）

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回（春・秋）にゴルフ競技会を開催しております。次回は令和5年5月20日（土）を予定しております。若い方も含めて、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

（連絡先）

下田 一彦 （H4年卒）

三木 穂高 （H26年卒）

連絡先 070-7814-5732（三木）
miki.hodaka@c5.kansai-td.co.jp



第118回 関西洛友会ゴルフ競技会 参加者集合写真

関西支部見学会報告

洛友会関西支部では、会員相互の交流を目的として、令和4年11月13日（日）に見学会を開催しました。

従来、関西支部では「家族見学会」と題して会員の家族も招待しての近畿地区の施設見学を中心とした休日イベントを実施してまいりましたが、今年度より支部運営体制の見直しに合わせて内容を簡素化し開催しました。

前半は、関西電力株式会社様のご協力により京都市左京区の蹴上発電所の見学を行いました。琵琶湖疏水の活用方法の一つとして水力発電の有効性を見出した若き技

術者の熱い想いととも同発電所が建設された歴史的経緯も含めてご説明いただいた後、疏水の水力で営業運転している発電機を間近で見学させていただきました。

後半の昼食会では、蹴上発電所に隣接するウエスティン都ホテル京都にて、武知支部長（昭和57年卒）のご発声による乾杯の後、料理に舌鼓を打ちつつ再会した同窓生との旧交を温めました。笑い声の絶えない和やかな雰囲気の中、最後に森副支部長（昭和61年卒）から締めのご挨拶をいただき、散会となりました。

あいにくの雨模様ではありましたが、3年ぶりに開催された見学会ということもあり、昭和38年卒から平成24年卒まで幅広い世代の会員と同伴のご家族39名にご参加いただきました。ご参加されたみなさま、発電所見学に多大なご協力をいただきました関西電力のみなさまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

伊藤 薫（平21年卒）記



四国支部 秋の見学会

2022年11月13日(日)に、四国支部恒例行事の「秋の見学会」が開催され、四国支部から15名が参加しました。例年開催されていた支部総会や秋の見学会は、2020年からの新型コロナ禍によりしばらく開催されておらず、支部会員が対面する行事としては今回が実に3年ぶりの開催でした。

一行はまず、高知県大豊町にある「杉の大杉」を訪れました。この杉は、幹囲が約15mと日本で8番目に大きいものでした。あいにく、雨が降る中での散策となりましたが、山にかかった霧とあいまって幻想的な風景を醸し出していました。次に高知県にある四国の水がめ「早明浦ダム」を訪れました。ダムに着いた頃には雨もあがり、ダム湖からの大パノラマの絶景が楽しめました。

昼食後、徳島県の大歩危峡を訪れ、少し早い紅葉を堪能した後、徳島県三好市の「芳水酒造」さんで酒蔵見学をさせていただきました。日本酒の製造工程や麹菌を相手に休みなく作業をする苦労話などを伺い、質問も飛び交うなど、大変有意義な見学でした。酒蔵見学後には、日本酒の試飲・即売会が開催され、皆日本酒を手土産に

帰路に着きました。支部会員の交流を深めることもでき、大満足の見学会となりました。
今年度ご参加頂けなかった四国支部の皆様、来年度は是非奮ってご参加ください。

繁樹真一郎(平15年卒) 記



訃報

昭26	昭28	昭28	昭30	昭32	昭32	昭32	昭33	昭34	昭36	昭40	昭40	昭41修
石川	前原	山本	木村	桑田	平栗	瑞光	藤本	宮本	松尾	秋田	市川	市川
進	恒之	権一	隆次	博	俊男	和之	寛	孜	益次郎	雄志	哲	哲
4・4・30	4・9・20	4・10・9	4・8・4	4・9・17	4・11・6	4・10・16	4・6・18	4・8・22	4・2・19	4・7・14	4・11	4・11

以上の方々がご逝去なさいました。
謹んで哀悼の意を表します。

